慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	吉井勇の『生ひ立ちの記』について:不二書房版と臼井書房版
Sub Title	
Author	田坂, 憲二(Tasaka, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2021
Jtitle	三田國文 No.66 (2021. 12) ,p.67- 80
JaLC DOI	10.14991/002.20211200-0067
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20211200-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

吉井勇の『生ひ立ちの記』について

-不二書房版と臼井書房版-

はじめに

がある。この二つは、分量的にも大きな差があり、加えて作品 と、戦後、二十年の歳月を経て刊行された臼井書房版の二種類 の『生ひ立ちの記』には、昭和初期に刊行された不二書房版 る上でも、伝記的事象を究明する上でも貴重な資料である。こ 短歌を交えながら記したもので、吉井勇の文学的出発を考察す 吉井勇の『生ひ立ちの記』は、幼年時代から青年期までを、

ことには問題がある。 題が補われたりしており、 二書房版を底本とするものであるが、『全集』の編集方針か のは、『吉井勇全集』第四巻に所収のものであろう。これは不 最末尾の五〇頁ほどが削られており、また原本にはない内 これを以て『生ひ立ちの記』とする

性の違いは何を意味するのかについて考える必要がある。

今日『生ひ立ちの記』として、最も一般的に読まれているも

の内容もまた異なった方向を指向している。したがって、二つ

『生ひ立ちの記』の内実はどう異なっているのか、その方向

以上のような理由から、改めてこの作品を取りあげて考察す

記に相違があるが、論述の都合上、統一的な名称としては「生 の記」であり、臼井書房版は「生ひたちの記」で、一字だけ表 るものである。猶、作品名の表記は、不二書房版が「生ひ立ち 坂

田

書房版の独自歌二十七首を一括掲出した。 猶、本稿末尾には、『吉井勇全集』に収載されていない臼井 タイトルも以上の立場による。

ひ立ちの記」の方を使用したことをお断りしておく。本論文の

「生ひ立ちの記」の本質

う。本稿では、不二書房版、臼井書房版、共に架蔵本により、 改めている。 引用に際して仮名遣いは原文のままとしたが、漢字は新漢字に 臼井書房版とでほとんど異同のない箇所を掲出して考えてみよ この作品の本質を最もよく示しており、かつ、不二書房版と それでは『生ひ立ちの記』とは、どのような作品か。

荘で過ごす習慣になつてゐた。この別荘は材木座の海岸に近いまり体が丈夫でなかつたので、一年の半は鎌倉にあつた父の別 第一篇「童心」の第三章「驢馬」は、「私は子供の時分あん

る。 三さのごとく海を見しかな」など五首の歌でその頃を回想す 大海はをしへぬ人の愁を」「われもまた御伽噺のなかにある かつた」と書き起こされ、「浪の音はいともはかなしいちはや かった」と書き起こされ、「浪の音は子供心にもかなり寂し 出来なかつたが、絶えず聞える浪の音は子供心にもかなり寂し

海岸を乗り廻した」として、次のように述べる。置かせて、得々としてその背に跨がつて毎日そこいらの野路やて帰つて来たもので」「私は早速それにふさはしいやうな鞍を馬」をめぐる記憶につないでゆく。「驢馬は父が支那から持つつづけて、この章の中核でもあり、章題になっている「驢

みぬ(中略)馬に乗り生命の水を取りにゆくお伽ばなしの世をも夢

おもひでとなればおどけし長顔の驢馬にも涙誘はれ

子供の時分のことを思ひ出してゐると、どんなことでも

る。

直きに「死」と云ふことを考へさせられるからである。しさを覚える。それと云ふのは私はこの写真を見てゐるとを出してじつと眺めてゐると、全く死にたくなるやうな寂寂しくなるものだが、殊に私はこの驢馬に乗つてゐる写真

てゐる。(中略)

「中略)

「中略)

「中略)

「中略)

「中略)

「中略)

「中略)

「中ではもう冷たく墓の下の土の中で眠つたで現在この世に生きてゐるのは私一人ぎりで、あとの二人のうちで現在この世に生きてゐるのであるが、この三人のうめに、私とは三つしか年の違はない若い叔父と、それかられの法はけた懐かしい写真には、驢馬に乗つてゐる私のてゐる。(中略)

おとうとよ墓は寂しく寒からむこの冬の夜をいかに眠しかな

かな(1)の死をかなしめば砂山も墓のごとくに思はれしる(3)(素)の死をかなしめば砂山も墓のごとくに思はれしるや

の」というのも、そうした思いの一環として捉えるべきであ時分のことを思ひ出してゐると、どんなことでも寂しくなるもれた時間に対する甘美な涙であると言って良かろう。「子供の「涙を誘はれ」ているのも、もはや戻ることのない時間、失わ「涙を誘はれ」ているのも、もはや戻ることのない時間、失わに張びいことを思ひ出してゐると、どんなことでも寂しくなるもれた時間に対する甘美な涙であると言って良かろう。「子供の「涙を誘は、前半の「小さなる」に始まる歌群は五首、後半の短歌は、前半の「小さなる」に始まる歌群は五首、後半の

と歌っているように受け取れる。 に映じた材木座の海岸を、「砂山も墓のごとくに思はれしかな」 か。三首目では、そうした肉親の相次ぐ死に直面した少年の目 吉井勇の前から程なく姿を消したように読めるのではなかろう とよ墓は寂しく寒からむ」とあり、叔父と弟の二人とも、少年 ろうか。「命短きかなしみをはやくも知りし」とあり、「おとう らである。では、この二人が亡くなったのは、いつのことであ 父も弟も、今ではもう冷たく墓の下の土の中で眠つてゐる」か ⁻死」を意識する思いへと転じていく。一緒に映っている「叔 ところが、驢馬に乗った自分と叔父と弟の写真のことから、

0)

はすでに三十代である。 なく、後年のことなのである。 は明治四十(一九〇七)年、吉井勇二十代のはじめである。 中の二人とも、たしかに早世しているのだが、栄助が没したの いであるが、記述と殆ど一致するとしてよかろう。「直ぐ次 八二)年生まれの栄助(英介)のことである。実際には四つ違 年の違はない若い叔父」とは、父幸蔵の末弟で明治十五 来る。吉井勇は、明治十九(一八八六)年生まれ。「三つしか ているので、虚実の境界を最も見やすい形で析出することが 構造があるのである。この部分では、人の生死について書かれ とにある。そしてそこには、一種の虚実皮膜の巧緻をつくした と、その叙述に導かれる様々な思いを歌の世界に封じ込めたこ 『生ひ立ちの記』の魅力は、地の文の事実に基づいた叙述 」とは明治二十二(一八八九)年生まれの中である。栄助 大正七(一九一八)年の没で、吉井勇 叔父の死も、 弟の死も、 少年時代では 二八八 0 出

> と捉えるべきであろう。 は、早世した叔父・弟の姿に重ね合わせて表出したものである に記された愛犬の死や、そのほか身近な人々の死を、この章で 祖父吉井友実の死や、「驢馬」の前章である第二章「高輪の家」 むべきものであった。『生ひ立ちの記』の冒頭に記されている 事実として、少年吉井勇にとって、死は身近にあり、恐れ悲し は寂しく寒からむ」は、亡き人への少年の哀切な思いである。 とは、少年の死の恐れと悲しみの表出であり、「おとうとよ墓 が許されるはずである。「命短きかなしみをはやくも知りし」 上に虚構の像を重ねることが許されるならば、「歌」にもそれ 側面を強く持っている。「物語」が事実に依拠しても、 後述する如く、最初の『生ひ立ちの記』は「歌物語」として

二 不二書房版『生ひ立ちの記

刊行された。以下に、全体の構成と、 金、上製本、本文二四二頁。 不二書房版『生ひ立ちの記』 第一篇 「生ひ立ちの記」 序歌 童心 昭和三(一九二八)年六月十日に は、 四六判貼箱入、丸背、 九首 所収歌数を示す。 天

第四章 第一章 第六章 第五章 第二章 薔薇畑 忘れえぬ人々 高輪の家 四〇首 三五首 二首 一五首 二〇首 五首

あった。この歌物語的性格が臼井書房版ではどうなっているか		٤
しく、歌物語的に語られた、幼年時から青年時の記憶と記録で	私が…尾久の水荘に住んでゐた時分のこ	はげあたま 私が…尾
ものがたり集(角書) 生ひ立ちの記 終」と記される。まさ	それはもう二十年あまりも昔のことで	骨牌の思ひ出 それはも
(角書) 生ひ立ちの記 目次」とあり、本文の末尾にも「歌		れている例を列挙しておく。
記」と記されているのである。目次冒頭には「歌ものがたり集	められているものである。それらが分かりやすい形で、あらわ	められているものである。それ
一方で、箱の背と、書物本体の背には「歌物語 生ひ立ちの	の度合いの強弱こそあれ、吉井勇自身の体験や記憶が根底に潜	の度合いの強弱こそあれ、吉井
房版」と記されている。本文の扉も完全に同じ形である。その	一層歌物語的傾向が顕著になっているが、虚構	る。後半部は、一層歌物語的傾
で三行に分かたれ「吉井勇著」「生ひ立ちの記」「東京 不二書	ルだけが列挙された後半部とから構成されていることが分か	ルだけが列挙された後半部とか
たことを明瞭に示している。箱には大きな題箋が貼られ、罫線	見して、二篇十二章に整然と分かたれた前半部と、タイト	一見して、二篇十二章に整然
不二書房版の『生ひ立ちの記』の書名表記の揺れも、そうし	総歌数五三四首)	(総歌
ことは、当然の帰結であったのである。	1二二首	亜刺比亜人形
部分と一緒に『生ひ立ちの記』という書物としてまとめられた	八五首	明眸行
いように見える「骨牌の思ひ出」以下の歌物語が、それ以前の	一六首	髑髏の絵
の姿にほかならない。「いさな船」を含めて、一見独立性が高	四〇首	緑の窓帷
房総半島に拠点を置いているその姿は、吉井勇自身の父親幸蔵	四〇首	酔狂録
の父親が「捕鯨事業を始めた」ことから語り始められており、	1 1 1 1 首	いさな船
友人の回想の形式を取っている「いさな船」であっても、友人	三五首	はげあたま
分のことであつた。(さう云つて私の友達は語りだした)」と、	三〇首	骨牌の思ひ出
これら以外でも、「それはまだ私が七つか八つ位の子供の時	一六首	第五章 即興詩人
けた	一一首	第四章 獺の話
明眸行 その翌日私は…戯曲「葡萄棚」の稿を続	一五首	第三章 老僕
そこに	一〇首	第二章 夢の女
髑髏の絵 十数年前…新橋の裏通り…私も無論毎晩	一〇首	第一章 厭世
15		第二篇 水のほとりに
緑の窓帷 私がまだ一人で鎌倉の阪の下の小さな家	一五首	第七章 うき世の波

要がある いる、『吉井勇全集』の『生ひ立ちの記』について見ておく必 最大の問題であるが、その前に、不二書房版を底本として

『吉井勇全集』 所収『生ひ立ちの記

のは 今日 『生ひ立ちの記』を読もうとするとき、最も入手しやす 『吉井勇全集』所収のものである。

- 「吉井勇全集』の名前で呼ばれるものは三種類がある。 1 『吉井勇全集』 番町書房 八冊 昭和三十九(一九六
- 2 七七) ~五十三年 四) ~四十年 『定本吉井勇全集』番町書房 九冊 昭和五十二(一九
- ①に増補したもの
- 3 『定本吉井勇全集』日本図書センター 九冊 昭和六十
- 三 (一九八八) 年

②を版面複製したもの

冊版との間に相違はない。本稿では、②の『定本吉井勇全集 の本文や解説文に関しては、元版の八冊版も、定本と冠した九 ② ③ が 同じものであるのは当然であるが、『生ひ立ちの記』

を使用する。

ある。 を隔てて復刊・再刊されるものが少なくない。その時に判型が ひ』『玄冬』 ある場合には、 ①の最初の全集以来一貫している編集方針として次のものが 吉井勇の単行本作品を収載するに当たって、複数の版が の歌集をはじめとして、 初版・元版に拠るという立場である。『酒ほ 吉井勇の作品には、 年月 が

> 並製、 る。 異なったり、出版社が変わったり、改編されたりするものもあ 異を掲出する必要があるのは言うまでもない る。もちろん完璧を期するためには、異版の本文との綿密な校 拠するという立場は、一つの考えとして容認出来るものであ 化している。こうした事情があるから、便宜上初版・元版に依 時下や出版社統合という特殊な事情にもよろうが、昭和十八 (一九四三) 年甲鳥書林A五判上製、昭和二十年養徳社四六判 一例を挙げれば『定本吉井勇歌集』という自選歌集は、 昭和二十二年養徳社横本箱入改編版と、めまぐるしく変

の『生ひ立ちの記』は完本ではないのである。 ○頁程度が削られているのである。つまり『定本吉井勇全集 ろが、そこでは、底本の不二書房版の冒頭の四頁と、最後の五 の書影が掲げられ、本文も当然不二書房版のものである。とこ 四五九頁までが『生ひ立ちの記』であるが、冒頭に不二書房版 とすることには一貫性がある。『全集』第四巻の三八一頁から さて、上記の方針であるから、『全集』が不二書房版を底本

同書解説に述べられている。『全集』第四巻には、『明眸 立した文章で重複しているものはいうまでもなく削除した」と 経緯については、「「明眸行」「亜刺比亜人形」などのような独 歌」「明眸行」「亜剌比亜人形」の三箇所が削られている。 録」「緑の窓帷」「髑髏の絵」である。不二書房版からは、「序 ひ立ちの記」「骨牌の思ひ出」「はげあたま」「いさな船」「酔狂 「厭世紀」「恋愛異聞」「亜剌比亜人形」からなる)も収載され 天弦堂書店、 完本吉井勇全集』の『生ひ立ちの記』を目次で示せば 大正五 (一九一六) 年。「明眸行」「女優伝

ったものであるから、歌人吉井勇の全集としては、第一級資料 情を過不足なく表している。しかも他の歌集には再録されなか のすべてがこの作品のために新たに詠まれたもので、作者の心 に回されてしまった、「序歌」四頁に含まれた九首の歌は、そ 完全には同文ではないのである。まして、『全集』巻末の解説 行」「亜刺比亜人形」の二つの本文も、『明眸行』所載のものと 杜撰な点があることは旧稿で述べたので再述しないが、「明眸 のこうした方針そのものについて疑念があり、またその作業も ているから、そちらを見よということなのであろう。『全集 『生ひ立ちの記』所載のそれとでは、句読点の位置も異なり、

として是非とも本文に掲げるべきものであっただろう。

大きさの活字で、同じ高さに記されているのである。作品の理 立ちの記」の文字が、「骨牌の思ひ出」以下のタイトルと同じ 集』三八○頁では「第一篇 童心」の前に底本にはない「生ひ という一つの歌物語として並列しているのである。実際、『全 になってしまう。『全集』編者は、第一篇と第二篇の部分を、 あたま」「いさな船」「酔狂録」「緑の窓帷」「髑髏の絵」と同格 のような表記だと、「生ひ立ちの記」が「骨牌の思ひ出」「はげ のように掲出されるものではない。これが『定本吉井勇全集』 ちの記」という名称は、あくまでも書名であって、目次に章題 の思ひ出」と並ぶ形で記されている。不二書房版では「生ひ立 うことである。『全集』の目次には、「生ひ立ちの記」が「骨牌 ちの記』の目次の表記そのものが、底本とは異なっているとい 「骨牌の思ひ出」や「はげあたま」と同格の、「生ひ立ちの記」 しかし、それ以上に看過できないのは、『全集』の『生ひ立

> え一字一句であっても付加してはならない。強く戒めなければ を得ないという考えもあるだろうが、 を削除することは、 生むような改変は、 かも原本が、こうした体裁で構成されているかのように誤解を 解は個々に委ねられるものであるからさて措くとしても、 ならないことである。 全集全体の分量の問題などもあって、 絶対に避けなければならない。原本の 原本にない文字は、たと

臼井書房版の形態

ル

の単なる圧縮かというとそうではない。重要な改編が見られる していると言えようか。それでは、 行で大きめの活字でゆったり組んでいるから、分量的には半減 っている。一頁一五行であった不二書房版に対して、一 文頁は全一八一頁で、不二書房版に比べて約六○頁分少なくな 瀟洒な装幀である。書名の問題については本節で後述する。 の黒文字で印刷する。 字で大きく、両側に「吉井勇著」「臼井書房刊」と小さく通常 持ち枠の中を三行に分割し、真ん中に「生ひたちの記」と朱文 取り上部の枠内に書名などを記す。そこでは、横長の朱色の子 カバーの有無は確認出来ない。本文扉は下部に空白をたっぷり め枠はない。造本から考えて箱は存在しないと考えて良 井勇」と記す。背表紙も同じく朱の題箋状であるが、薄冊のた は朱の題箋状のデザインで子持ち枠の中に「生ひたちの記 一月五日刊。四六判角背のすっきりとした装幀で、表紙の 臼井書房版 『生ひたちの記』 朱色を、シンボルカラーとしたような、 は、 臼井書房版は、 昭和二十四(一九四 不二書房版 いが、 年

九

のである。臼井書房版の目次を示してみよう。

童心

第一章

公孫樹

二首 三五首

第二章

一篇 少年の悲しみ 第四章

忘れえぬ人々

四〇首 二〇首

驢馬 高輪の家

第一章 二章 初恋 骨牌の思ひ出

第四章 うき世の波

篇 第一章 蘆のそよぎ 厭世

第二章 第三章 夢の女 老僕

五首 ○首 〇首

第四章 獺の話

第四篇 悪の巷

即興詩人

六首

(一首追加

首

寄席通ひ

一〇首 (すべて新作

上述したように、 或る転機 臼井書房版は、 (総歌数 二五七 五七 音 音 不二書房版に比べて量的に (すべて新作

は半減していると思われるのだが、

それは総歌数の比較からも

う。

いる。それ以外の共通する章では、 分の一に圧縮されているから、歌数もそれに比例して減少して 窺えよう。個別の章では、「骨牌の思ひ出」は不二書房版の三 歌数に変化がないか、一首

程度の差し替えに止まる。すなわち、最小限の修正に止まって いることが看取されよう。もちろん、歌数に変化のない章で

四首 首削除

逞ましき犬飼ひにけり」(不二書房版・高輪の家)「高輪の家の 名の表記の変更のほか、「高輪やこれも奢りのひとつとていと も、丁寧に手が入れられており、仮名遣いの修正や、漢字・仮

〇首 (一首追加

首削除

五首

五首

同)、「冬の夜の夜がたりをかし声立てて暖炉の火もともに笑へ奢りのひとつとていと逞ましき犬飼ひにけり」(臼井書房版・

ているから、文章の小さな改変ならば、ほぼすべての章にわた 地の文に関しても、再版に際して丁寧な見直し・修正が行われ 炉の火も笑ふごとく思へば」(臼井書房版・同)などがある。 ば」(不二書房版・獺の話)「冬の夜の夜がたりをかし声立てて

家」に登場する、少年勇の愛犬の名前が、不二書房版では っている。これも一例のみ上げれば、第一篇第二章「高輪の 「玉」であったものが、「ベア」と改められている。前掲した

しいように名前を替えた可能性の方が強いのではないだろう う。物語として一貫性を持たせるために「逞ましき犬」に相応 の飼った犬の実際の名前であったと断じるのは倉卒に過ぎよ いであろう。もちろん、似つかわしいから「ベア」が、 歌の表現「いと逞ましき犬」には、こちらの名前の方が相応し 猶、このことは六節の問題とも関連する。

さて、 臼井書房版の再構成の根幹は、概ね以下のようになろ

では、第一篇全四章、第二篇全四章に再構成する。名前をそのまま継承し、第二篇は「少年の悲しみ」という篇名を新たに立てる。不二書房版の後半の、歌物語的色彩が一層濃度な部分にあった「骨牌の思ひ出」の文章から、約半分を抽出厚な部分にあった「骨牌の思ひ出」の文章から、約半分を抽出厚な部分にあった「骨牌の思ひ出」の文章から、約半分を抽出厚な部分にあった「骨牌の思ひ出」の文章としたがって二つに分割する。新しい第一篇は「童心」を、時全七章と長大であった不二書房版の第一篇の「童心」を、時全七章と長大であった不二書房版の第一篇の「童心」を、時

不二書房版第二篇の「葦のそよぎ」全五章から、最後の「即不二書房版第二篇の「葦のそよぎ」全五章がら、最後の「即興詩人」を除いて、篇題はそのままに第三篇全四章とする。新興詩人」を除いて、篇題はそのままに第三篇全四章とする。新興詩人」を除いて、篇題はそのままに第三篇全四章とする。新興詩人」を除いて、篇題はそのままに第三篇全四章とする。新興詩人」を終いて即

の背表紙などにあった「歌物語」などの文字は、臼井書房版に えようか。書名表記にもそれは明確に現れていて、不二書房版 立ちの記」という名称から読者が予想するものに近づいたと言 的色彩・回想記的色彩を濃くしたと思われるのである。「生ひ ち、不二書房版では濃厚であった歌物語的色彩を薄めて、 実としては②③の方がはるかに重視すべきものである。すなわ えたこと、以上の三点にある。形式としては①が重要だが ること、③第四篇の「寄席通ひ」「或る転機」を新たに書き加 房版の後半を削除 各篇を三~四章のバランスの取れた形式にすること、②不二書 要するに、 井書房版の改編の根幹は、①全体を全四篇で、 (再構成された「骨牌の思ひ出」は除く) 伝記 内 す

ちの記」で一貫しているのである。(こ)は一切見られない。表紙、背表紙、扉、奥付、すべて「生ひた

が、それは節を改めて述べることとする。機」として何が追加されたかこそが、最も重要な問題である機」としてがって、第四篇の第二章「寄席通ひ」第三章「或る転したがって、第四篇の第二章「寄席通ひ」第三章「或る転

五 臼井書房版の目指したもの

る。 房版の第二篇(不二書房版では第一篇の後半)の高輪時代に ている。それら後半部の中の一篇「骨牌の思ひ出」が、臼井書 明らかに尾久時代の出来事である「はげあたま」などが置かれ るが、その中には高輪時代の記憶に繋がる「いさなとり」や、 こともできよう。 後半部とにわけられていた。前半は、吉井 形で構成されている第一篇・第二篇と、その位置づけが難し み込まれるときにどのような操作がなされているかを見れば、 て、第一篇を高輪時代、第二篇を尾久時代という言い方をする 一種類の『生ひ立ちの記』の特色が浮き彫りにされると思われ 「明眸行」などは更に後年の青年期の吉井勇の姿が描かれて 不二書房版の『生ひ立ちの記』 後半部の 「酔狂録」「緑の窓帷」「髑髏 は、ほぼ時間軸に沿うような 勇一家の居所によっ

家が高輪に移つて来たばかりのことだから私がまだ六つか七つの思い出である。「子供時分一番最初に知つた骨牌」は、「私の置かれ、以下三部構成となっている。その一は、「大名歌留多」浮ぶま、に断片的に書いていつて見やう」という序文が冒頭に不二書房版の「骨牌の思ひ出」は、その「二つ三つを、心に

てが異なった時期、異なった骨牌につながる記憶であるとい ぐような、あこがれるような思いを通底させ、しかも三部すべ る。三つの話全体に、禁断の世界の入口に立った少年のたじろ 首の思い出である。女世帯の妹娘に対する複雑な思いも描かれ ら五六年経つて」「中学に通ひ始めたばかり」の頃である。 負に熱中する人々の姿が描写される。その三は、更に「それか ある。「馬丁部屋」で行われていた花骨牌と、金銭を掛けた勝 ら二三年過ぎて」であるから、吉井勇が八、九歳の頃のことで 位の時分のこと」であったかと回想する。その二は、「それ 「『金色夜叉』の最初の場面」を彷彿とさせる、正月の百人一

か

ひ」、第三章の「或る転機」とはどのような内容であろうか 第四篇第一章の「即興詩人」は、府立一中から攻玉社中学に さて、全く新しく書き下ろされた第四篇の第二章 『即興詩人』を読んで「自分のアヌ 寄席 通 の特色と言えよう。

の強力な磁場のもとに記事を統一する。これこそが臼井書房版 によって統一されている記事の中に挿入したのである。時間軸 に位置づけている。骨牌をめぐる思い出話を解体して、時間軸 井書房版では二の話を中心に取り出して、高輪時代の後半の中 う、巧みな構成である。前後、十年近くにわたるこの話を、

臼

転じた吉井勇が、森鷗外の

興詩人アントニオを以つて任ずるやうになつたのである」と結 ンチヤタを或る場末の寄席の舞台の上に見出して以来、 自ら即

アヌンチヤタは、華やかな劇場の脚光を浴びて、喝采の声と花 席通ひ」は、 それを直截的に受ける形で「『即興詩人』 0)

> 学に対する熱情だけは、さうやすやすとは消え去らなかつた」 ると、不思議な程あつ気なく止んでしまつたけれども、 が旅興行に出て、私のアヌンチヤタを舞台の上に見られなくな た」と続ける。そして「私の寄席通ひは、その女歌舞伎の 語中の人物であるやうな心持がして、夢中になつて読み耽つ 歌舞伎に似通つた世界であるだけに、私はまるで自分がその く高ま」り、「鏡花の『照葉狂言』は、書かれてあることが女 うのが章題の由来である。一方で「文学に対する熱情」も「深 寝にもこの女を忘れることが出来」ずに、寄席通いをするとい 者であつた」と書き起こされる。この役者に夢中になり、 て、卑近な掛け声と空疎な拍手を得てゐるやうな女歌舞伎の役 は、場末の寄席の狭苦しい舞台の上で俗悪な演技を見物に観せ 束の渦の中で妙技を演じた女優だつたが、私のアヌンチヤタ 私の文

鏡花、この二人の作品との出会いを、文学的出発の起点と位置(タ゚)。後年の吉井勇が、敬愛して止まなかった森鷗外と泉 づけようとしているのであろう。 ら刊行されているから、吉井勇が読んだのはこれらの本であっ と結ぶのである。『照葉狂言』は明治三十三(一九〇〇)年、 『即興詩人』は明治三十五(一九〇二)年に、ともに春陽堂か

晶子や鉄幹の作品などを読み耽り、「明星」の歌風に惹かれ、 中学卒業後病を養っていた吉井勇が、療養生活の中で、 人となったことに置くべきであろう。次の「或る転機」では、 新詩社に入社することが書かれている。そして、 もちろん本当の意味での吉井勇の文学的出発は、 自分の人生の

「第一の転機は、この病気に依つてはからずも得た、歌作を動

が出来よう。 しい『生ひたちの記』として再生させようとしたとも言うこと が看取出来る。それは自由に飛翔する歌物語 くくろうとする強い構成意識によって書かれたものであること をそこに置くことで、自らの少年時代を綴ったこの作品を締め 機とするものではないかと思ふ」と記している。「寄席通ひ」 或る転機」の二章は、その後の文学者としての生き方の起点 自身の文学的出発の起点を語る伝記性の強い作品へと、 的要素を希薄にし 新

はないからである。 い。歌物語的要素は希薄になりこそすれ、皆無となったわけで そのものとして読むことについては禁欲的であらねばならな ただし、臼井書房版の 『生ひたちの記』を吉井勇の伝記資料

の伝記資料として最も頻繁に使用される「私の履歴書」には、吉井勇は、中学卒業後、肋膜を病み療養生活に入る。吉井勇 な印象と死への恐怖を刻んだに相違ない。弟中については第一 病臥中の吉井勇にとって同じ病で妹が世を去ったことは、 の許しを得て、遺骸と共に帰京。」と記されているのである。 ともに枕を並べて病臥す。七月、国子杏雲堂病院に死す。 間もなく病重りて平塚杏雲堂病院へ入院。次弟中、少妹国子、 に、「四月、攻玉社中学を卒業す。試験の前より肋膜を病み… 和十二(一九三七)年)巻末の自作年譜には、もう少し詳 になった」とある。『短歌文学全集 吉井勇篇』(第一書房、 もなく肋膜を病んで、平塚の杏雲堂病院に一年近くも入院した 明治三十八(一九〇五)年四月攻玉社中学を卒業した後に「間 鎌倉の坂の下に貸別荘を借りて、そこで転地療養すること 病院 昭 細

0

もう一つ、「或る転機」では、鎌倉生活の時点で「晶

芋の

まつた」と記されている。茅ヶ崎の結核療養施設として、 同時位に同じ病院に入院してゐたが…到頭ここで世を去つてし を過すやうなことになつた…私の妹も同じ病気で、 杏雲堂病院であるのだが、『生ひたちの記』「或る転機」には に想起されるのは、国木田独歩などが療養した南湖院である。 「茅ヶ崎の海岸にあつた或る病院の一室で濤声を聴きながら時 以上二つの資料では、吉井勇が入院していたのは、平塚市 私と殆んど 直ぐ

節で見た通りである。

とを考えても、南湖院の国木田独歩のイメージが、 者』の主人公に「私」が重ねられる構成になっている。 住んでいたころであるから、鎌倉の海岸から始まる『運命論 る。「その頃」とは厳密には、 たものは、『運命論者』といふ小説であつて」と記されてい 書いたものを愛読してゐたが、その中でも私に強い感動を与へ たのであろう。「或る転機」には、「その頃私は、 養の時空と、当時の吉井勇の不安を鮮明に読者に伝えようとし 堂病院よりも一駅東に位置し、同じく相模湾に面していてほと ろうか。具体的な病院名、療養所名を出さずに「ある病院」と の言葉を使えば、歌物語としての)虚構と考えるべきではなか る。これは、吉井勇の記憶違いではなく、作品としての(本稿 んど環境が同じである茅ヶ崎の南湖院のイメージを借りて、 いう朧化した書き方をしていることもそれを推測させる。 「松林の中にあつて、 根底にあることは疑いのないことであろう。 極めて閑寂なところ」というのも一致す 退院後、鎌倉の 由 比ヶ浜近くに 国木田 一或る転機 療

ことによって、歌への傾倒、 ここに『みだれ髪』や『紫』の読書体験をあえて重ね合わせる の如きものに御座候」との手紙を貰ったとも記されているが、 す」とあり、この「或る転機」には、さらに鉄幹から「歌は禅 先生に手紙を送つてその門に入らむことを乞ひ、新詩社に加盟 の日々の中で「歌を学ばむとする念漸く強く、遂に与謝野鉄幹 これらの本を読んでいたのである。自作年譜には、鎌倉の病後 いることにも注目したい。上述した『短歌文学全集 『みだれ髪』『小扇』鉄幹の 「与謝野鉄幹の 』の自作年譜には、明治三十五(一九〇二)年の項目に、 肋膜で療養した年の三年前、 『紫』同晶子の 『紫』」などを読み耽ったと書い 明星派への傾倒を強く位置づけよ 府立一中三年生の頃にすでに 『みだれ髪』を愛読 す」とあ 吉井勇 7

に踏み込んでいく様まで描くことによって、この作品の一つのう「或る転機」を経て、文学の扉を大きく押し開けて、その道きつぎ、「寄席通ひ」を経て、病を得てそれから立ち直るといが、不二書房版の『生ひたちの記』は、その扉の前に立った段階で断ち切られて、後半の歌物語へと流れて行ってしまっていい。 田興詩人』によって導かれた文学への扉であった森鷗外の『即興詩人』によって導かれた文学への扉であった。

うとしたのであろう。

六 『生ひ立ちの記』の本質・再び

結末としたのであろう。

ると言っても、あくまでも歌物語的虚構性の範囲内であるとい改めて確認しておきたいのは、臼井書房版が伝記性に傾斜す

で。』と年嵩らしい様子で云つたのは、私よりは五つ六つ年上 これが、臼井書房版では、「『まあ、 年上の、才媛らしい顔付をした娘であつた」と記されている。 涙ぐんで。』と云ひながら、年嵩らしい様子で私の顔をしげ る。不二書房版では、その少女は「『まあ、 場の雰囲気になじめずにいる少年に、一人の少女が近付いてく た、或るかなり名高い将軍」の凱旋の日の出来事である。 第一章「初恋」(不二書房版では第一篇第五章) で、最後にそれを紹介しておこう。それは、臼井書房版第二篇 現を捨てて抽象的な表現に改め、 うことである。不二書房版を踏襲した部分にも、 の才媛らしい顔付をした娘であつた」と改められている。 と見つめた。それは私の従姉にあたる、私よりは五つ六つ 大山元帥をすぐに想起させる「亡くなつた叔母の嫁いでゐ 物語性を強める箇所があるの 如何なすつたの、涙ぐん 如何なすつたの、 の箇所である。 逆に具体的

は多くの叔父・叔母がいるから、大山巌の娘に限定する必要はは多くの叔父・叔母がいるから、大山巌の娘に限定するとすれば、早世した長女信子(『不如帰』の浪子を語る」(『婦人公論』昭和九年三月号)のほか、吉井勇が主宰した『相聞』(太白社)にも寄稿している。)となろうが、そうしたことを詮索することは、この作品る。)となろうが、そうしたことを経索することは、この作品る。)となろうが、そうしたことを経索することは、この作品る。)となろうが、そうしたことを経索することは、この作品の正しい理解には邪魔になるだけであろう。もちろん吉井勇にの正しい理解には邪魔になるだけであろう。もちろん吉井勇にの正しい理解には邪魔になるだけであろう。もちろん吉井勇にの正しい理解には邪魔になるだけであろう。もちろん吉井勇にの正しい理解には邪魔になるだけであろう。もちろん吉井勇にの正しい理解には邪魔になるだけである。この「従姉」が、大山巌の娘に限定する必要はいるというない。

の強い思いが伝わってくるようである。

このあと「しよんぼり眺めてゐたところだつたので、かうやこのあと「しよんぼり眺めてゐたところだつたので、かうやこのあと「しよんぼり眺めてゐたところだったので、かうらなかつた」と記し、その少女に声を掛けられたときの思い出が、「初恋」というこの章のテーマに通じてくるのである。ところが、臼井書房版では、「どんなに嬉しかつたか知れるかつた」のあとに、わざわざ「それは何処の如何なる家の娘なかつた」のあとに、わざわざ「それは何処の如何なる家の娘か分らなかつたけれども」という一文を加えている。これはか分らなかつたけれども」という一文を加えている。これは、「従姉」云々を削除したために、バランスを取るために関したので、からやにで優しい言葉をかけられるのが、どんなに嬉しかつたか知れるで、力を加えている。これは、「どんなに嬉しかったが知れるで、からやいがいている。

の作品の本質であったと言うべきであろう。
このように、臼井書房版でも失われていない歌物語性は、

おわりに

吉井勇の『生ひ立ちの記』は、戦前の不二書房版、戦後の臼

らない。 二書房版のみが注目されてきたのだが、それは改めなければな井書房版とがあり、それぞれ異なった魅力がある。従来は、不

もあった。虚構、物語、歌物語へと大きく傾斜する過程が見出も、あえて他人の経験として、虚構性を強調しようとしたものようである。特に後半には、自身の体験や経験にもとづく素材たが、次第に歌物語性が強くなって、自伝的要素は放擲された不二書房版は、自叙伝と歌物語の融合を目指したものであっ不二書房版は、自叙伝と歌物語の融合を目指したものであっ

せる。

と、この二つの世界を自由に往還するのが、この作品の魅力での後半をすべてそぎ落とし、自叙伝風の前半の完成を目指したものである。歌物語性は希薄になったが、作品の中には依然として残存しており、書き加えられた部分にも、あえて事実とは異なる素材の配置なども見られる。

不二書房版の『生ひ立ちの記』は、自叙伝的要素を内包した不二書房版の『生ひ立ちの記』は、自叙伝的要素を内包した不二書房版の『生ひたちの記』は、歌物語性を歌物語であり、臼井書房版の『生ひたちの記』は、歌物語と自叙伝統として残るの前半のであると言えば良かろうか。歌物語と自叙伝統といるの後半をすべてそぎ落とし、自叙伝統の前半のが、この作品の魅力である。

洼

あると言えよう。

は元版では「二人の叔父」と読まれる危惧があり、臼井書房版ではは叔父と弟も。①は刊行年次が約二十年後だから、当然の修正。③は叔父と弟も。①二十年も前→(臼)四十年も前 ②私とは三つしか→掲出する。①二十年も前→(臼)四十年も前 ②私とは三つしか→掲出する。①二十年も前→(臼)四十年も前 ②私とは三つしか→

されているが、不二書房版、臼井書房版共にこの箇所にルビはな は「この写真を見てゐると直きに」の部分で「直きに」とルビが附 「叔父」と「弟」の二人であることが明確になる。猶、『全集』で

- が、もっとも詳細で、正確にまとめているのでそれにしたがう。 酒ほがひ』(明治書院、平成十(一九九八)年)の鷺只雄の解説 関係者の生没年については、『和歌文学大系』二九巻『桐の花・
- 3 次弟中は、吉井勇が中学卒業後肋膜を患って療養していたとき
- (4) 田坂「吉井勇の歌集『金泥』について」『三田国文』六四号、 に、同じ病院に入院していた。五節参照。 和元(二〇一九)年一二月。 令
- 勇旧蔵の『生ひ立ちの記』があるが、これにもカバーはない。 られたグラシンのみであった。京都府立京都学・歴彩館には、 臼井書房版を四冊ほど入手したが、いづれも古書店で新たに掛け 吉井
- 6 内扉に「生ひ立ちの記」とあるが、箱・表紙・扉・奥付「生ひた 臼井書房版の独自歌については、末尾の一覧表を参照のこと。
- ちの記」で一貫しており、これは誤植と考える。
- つた」という発言もある。 るやうにして、忘れもしない三田通りの慶応義塾の直ぐ下にあつ 昭和十八(一九四三)年)に、「広告を見てから出るのを待ち兼ね については、「昔の愛読書の興詩人」(『歌境心境』湯川弘文社、 榎の地名の由来と言われる上行寺のことである。また、『即興詩人』 る寺」とは、当時高輪にあり、域内に二本の榎があったため、二本 町か来し」などの四首の歌が末尾に置かれている。「其角の墓のあ た、福島屋といふ本屋でそれを買つて、その夜一気に読了してしま この文章のあと「うつつなく其角の墓のある寺のまへも通りて幾
- められており、『短歌風土記 大和の巻 (一)』(創元社、昭和二十 のくがだち酒のたぎち酒鏡花小史に酒たてまつる」など八首がまと 昭和五(一九三〇)年)に「鏡花礼讃」という歌題の下に「うま酒 拾うことが出来る。一例のみ挙げれば、歌集『鸚鵡杯』(太白社、 泉鏡花や森鷗外に対する吉井勇の敬愛の念は、歌や散文から多く

- 簡を見出で、観潮楼歌会のころを思ふ」として「鷗外手簡」の歌題 の下に十首がまとめられている。 一(一九四六)年)には「丹波市の天理図書館にて、鷗外先生の手
- 年) 再録のものに拠った。 の履歴書 文化人1』(日本経済新聞社、昭和五十八(一九八三) 昭和三十二(一九五七)年に『日本経済新聞』に連載。いま『私
- 11 **ゐしわれにやはあらぬ」「独歩忌の六月二十三日にはおもひでの歌** 「或る転機」の章に「『みだれ髪』読みて作者の情熱にうつら酔ひ
- われもつくらむ」などの歌があるのは、そのことを象徴的に示して いよう。

附、臼井書房版『生ひたちの記』独自歌

で、そのままとした。末尾に臼井書房版の頁数を附した) 「寄席通ひ」の三首目は「燈」「灯」の使い分けがあるの 仮名遣いは原文のままだが、漢字は新漢字に改めた。ただ

少年のこころ市井にあこがるるころともなれば春 雁の来る (九一頁)

第二篇第二章 骨牌の思ひ出

人の世のまことを知らむこころより誘惑の手を待てるならぬ 第四篇第一章

即興詩人

第四篇第二章 か(一五六頁 寄席通ひ

即興詩人はじめて読みし感激を思ひ出せばいまも胸鳴る 六五頁 南欧の恋物語かなしくていくたび深き吐息つきけむ(以上一

いまもなほむかしを思ひ出でしむる寄席行燈の灯あかりもが

ひすも いまの世もアヌンチヤタをば見むものとわれや夜毎に寄席通

むかし聴きし説経節の 「苅萱」の声のほそさも忘られなくに

(以上一六六頁

夕戸出の夢見ごこちに聖 坂伊皿子坂をくだりけるかも(以寄席通ひ夜毎にしたりわが鏡花ゑがく世界に住めるここちに 木戸あかり下足の札の音にさへ胸ときめかす吾なりしかな

上一六九頁)

しみじみと照葉狂言読みたるも身につまさるることあればこ

君が名のあらざる寄席の看板はさびしきものか冬雨も降り

(以上一七〇頁

第四篇第三章 或る転機

わが胸の浪のひびきとかの海の潮の音といづれさびしき寂しさのはてを極めむねがひ持ち病ひの床のしづけさに居り わが辿る人生の路しらじらと見えて寂しき夜半なりしかな 松林尽くれば砂の丘ありきかかる景色をいまだ忘れず

(以上一七三頁)

運命の丘と名づけし砂山にわれ日ごと来てものを思ひぬ

思ひ出は悲しきものか亡き人のたましひのごと白き蝶

飛 Š

「みだれ髪」 読みて作者の情熱にうつら酔ひゐしわれにやは

歌つくることを幸とし半生のなげきかなしみなべて忘れむ

過ぎし日のなげきのいろになほ咲くや滑川辺のなでしこの由比ヶ浜その渚辺にわれありて波とたはむる風とたはむる

あはれなる歌をつくるも人の世の幾起伏のいやはてにして 花(以上一七七頁)

運命の不思議に思ひあたるときわが目おのづと睜かれつつ

(以上一八〇頁

独歩忌の六月二十三日にはおもひでの歌われもつくらむ あへぎあへぎわが辿り来し人生の路を思へば蹉蹉たるかなや

鎌倉の海の遠鳴いまもなほ聴こえ来るかと耳を傾く(以上一

(後記)吉井勇関係資料の閲覧に御高配を賜った京都府立京都

学・歴彩館に厚く御礼申し上げます。

(たさか・けんじ)